

---

# 魔女の館

月之輪熊男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔女の館

### 【Zコード】

N50500

### 【作者名】

月之輪熊男

### 【あらすじ】

魔女の館の住人とその仲間の話

つす暗い、都心の路地裏。高層ビルの隙間から空が見える。夕暮れ、少し過ぎて夕と夜の境。黄昏。日が沈みかけて顔が見えなくなる時間、昔の人は聞いたのだそうだ。たそかれ、あれは誰だ、と。今俺の田の前のいる連中の顔も、すでに輪郭しか見えない……わからなくて困る相手じゃないか。

「おい、お前が駿河つてやつかあ」

三人組の男達、その先頭に立つリーダー格。「つい。なんか、『ゴリラっぽい』。

「お前、『無双の喧嘩王』とか呼ばれてるらしいなあ。すげえじゃん、はは。」

高圧的な、人をばかにした口調。だらしない立ち方、右足の貪(くわ)すり。こうじうのを最近は「DOK」と言ひぢしき。つまるところは不良とかチンピラだ。

「お前を倒すと名があがんだよ、俺のさ。つーわけでりゅつとお前、ボコされるよ。」

ヒヤハハ、みたいな下衆な笑いがビルの隙間の路地裏に響く。

「お前もか……。」

たまに、いるのだ。喧嘩師でもない俺を捕まえて勝負を挑むやつが。そういう馬鹿が。

「おい、『ゴリラ。』

「……あああ？」

「ゴリラの声が怒りを帯びる。小刻みに揺れる足が激しさを増す。

「おい『ゴリラ、早くしろ。』

「てめえ、いい加減にしやがれよ…………。」

「ははは。おめえ完全に但馬さん怒らせたな。お前死んだよ。」

右の男が軽薄そうな口を開いた。虎の威を狩るなんとやら。貴様

には狐男を命名しよう！ただし脳内で。

手に持っていた鞄をあらす。薄い、学生に定番のものだ。自然と

バランスを崩した鞄は倒れる。

「ほら早く来い、我が家の晩飯まで後15分だ。」

「……おい。」

男が左右の二人に合図をする。左の男もゴリラ同様な、じつくて馬鹿っぽい感じのやつらだ。その一人が俺を囲むように動く。

「おいてめえ、んななめた口きてただで済むと思つてんじゃ…」

「つるせえ！あと14分なんだ急げ！うちの魔女殿は怒らすと恐いんだ。」

麻耶は、魔女殿は他人を待つことが嫌いだ。そういえば先に風呂に入ると怒る。多分他人に合わせること自体嫌いなんだろ。社会不適合者め。

「……上等だよ殺してやる、いけ！」

主格の男、ゴリラ但馬が視線を送る。攻撃の合図と判断する。こつちの不意をつくつもりだろうか。

「おらあ、あ！」

視線を受けた右の男が拳を振り上げる。グーパンってやつだ。武術を知らないやつの常套手段。殴られるよりも早く、その拳に肘を打ち込む。右腕に衝撃が伝わる。男が鈍い声を上げた。こぶしの骨が折れたのだろうか。殴り方を知らないやつはすぐに手を壊す。まつたく、無知は恐ろしいなあ。

さて。予想外の反撃に驚いたのか、はたまた下つ端は命令がないと動けないのか。左の男は動かずにはいる。ひどく魚に似たな顔をしている。

肘を打ち込んだ右腕で、左足を踏み込み、そのまま魚顔を殴り飛ばす。ぐあ、みたいな声を上げて男はビルの壁に倒れこんで、そのまま気を失った。

「ほら、ゴリラ。お前で最後だ。」

「おい…小野、前田…お、起きろよ……おい

「ゴリラは未だに突つ立つたまま。それどころか指先も声も震えている。俺を恐れているのだろう。所詮はどこにでもいるくだらない不良だ。学校で恐れられる俺様かつこいいみたいな馬鹿が裏通りの噂を聞いてカツアゲ感覚で喧嘩をしに来たんだ。自分が簡単に負けるわけがないと確証もなく思い込んで。

「まったくもって、愚かしいな。」

相手をするこっちの身にもなつてほしいものだ。自分の身勝手に他人を巻き込みやがつて。くだらない見栄のため、こうして今日も魔女殿に俺は怒られるんだ。腕の時計は6時52分を告げている。たとえ走っても時すでに遅し。すでに我が家で自席にスタンバイなさった魔女殿がいらっしゃし始めた頃合だ。

「おまえ、よ、よくも…」

ゴリラ但馬が安いプライドを言葉に表す。

「黙れ。」

痛みに顔を歪ませたまま手を見つめていた狐男（反泣き+嗚咽）の腹を蹴り飛ばす。

「ぐへえっ！」

「ひいいつ！」

倒れた狐男は、一瞬呼吸が止まつたあと激しく咽<sup>むせ</sup>こんだ。ゴリラは情けない声を上げてから固まつたまだ。

「おいゴリラ野郎。」

「は、はいっ！」

「そこをどけ。俺は帰る。文句はないな。」

「あ、ありません。」

ゴリラは完全に戦意を失つたようだ。後ずさるよひよひして道を空けた。

時、すでに遅し。

三人組に絡まれたのが6時42分。狐男の腹を蹴り飛ばしたのが6時51分。そして家に着いたのが、7時：3分だった。

この街の外れにたたずむ荒れ果てた庭に囲まれた豪奢かつ瀟洒な洋館。魔女の住む館、とか。悪魔の家だ、とか。不吉な噂の多いその洋館が我が家だ。

日本人のベーシックな帰宅の挨拶と共に玄関のドアをぐぐつた俺を、妹の恵理が迎えてくれた。

「お帰り。」

恵理。妹。正式名称は駿河恵理。料理上手で温厚で家庭的な15歳AB型女。涙もらい。面倒見がいい。両親について世界中を回っていた恵理が日本に住み始めたのが約半年ほど前。外国語なら何ヶ国語も話せるバイリンガルだが日本語には不慣れ。漢字が苦手で短文で話すことが多い。

「麻耶さん、待ってる。」

そういうて恵理は食堂に消えた。俺は部屋に戻り皮製の黒い手提げ鞄ををいて、それからブレザーをハンガーにかけ手を洗う。

我が家こと大正ロマンなこの葉桜館は広い。鹿鳴館をご存知だろうか。あれを思い出したりイメージしてくれればいい。木製二階建ての中には10を超える居室、冷暖房機能完備、やたらと大きな食堂にアイデンティティ不在の多目的室、同様に無駄に広い浴場、バルコニー、そして建築様式に合わない屋根裏部屋、etc.。

なんども改築やら補修やらを繰り返し見た目にそぐわないほどすごしやすい我が家。多少交通の便が悪いのは仕方がないので我慢。ちなみに俺の部屋は一回、東側の端。

食堂に降りていく途中で葵に出くわした。

「おかえりなさい俊哉さん。」

葵。正式名称は…なんだろう。藤宮葵でいいのか。我が家の魔女殿の妹。居候にして不登校かつ引きこもりがち。この辺は深い事情があるのでまたの機会に説明をしよう。

男のような振る舞いに言葉遣い、読書好きで乱読家。博識で気配り上手。一言で表すならスマート。目印は銀の指輪と伊達眼鏡。

「姉さん、怒っていますよ。」

口元にいつものアルカイックスマイル。こいつはなかなか表情が崩れない。

「やつぱりか。」

「まあ、いつものことですがね。」

微笑。

肉体的に、生物学的に言うなら葵もまた魔女殿麻耶の妹だ。葵と麻耶の仲は、まあまあ。

食堂の扉を葵が開く。続いて俺も中に入る。

最大で12人もの大人数が座れる大きな洋風のダイニングテーブル。並べられた料理は中華。天津飯、ギョーザ、回鍋肉に中華風たまごスープ。

わが妹の趣味は料理である。その腕は並みの高校生をはるかに超えるだろう。しかも世界中を回つただけあってレパートリー豊か。キッチンは名も知れぬスペイスであふれている。

それらにはすべて湯気がたっていた。俺の帰宅を待つて温めなおすのだろう。

「俊哉、遅いぞ。」

テーブルの真ん中で苛立ちを隠さずに俺を見る女。麻耶だ。

「悪かった、また絡まれてたんだよ。」

麻耶。スレンダーで高身長。本来はブロンドの髪を栗色に染めている。ぱっと見れば仮頂面ながらも美人だが性格は高慢にして傲慢、不遜、ひねくれ者で天邪鬼で冷淡。弱点は意外と18禁トーク。情報提供は級友のみやびさんから。

それから、魔女と呼ばれている。

「明日からは遅れないよ。」「

「はいはい。」

今日はお怒りが少ないようだ。

「食べよう、恵理。」

待ちかねたように呼ぶ麻耶。恵理は食器を洗う手をとめて食卓に着いた。

彼女は、麻耶は本物の魔女だ。なんの比喩表現でも誇張でも、まして冗談なんかじゃなくそう呼ばれるに値する力を持つている。

それは麻耶の一族が数世紀の間受け継いできたものらしく、無くなつたお父さんからの遺伝だと聞いている。

それならば当然彼女の実妹、藤宮葵やら茜やら翠やら丘里にもその能力はある。ただなぜ彼女たちが魔女扱いを受けていないのかはまた別の話なので先ほどと同じく割愛させてもらひ。

それぞれ食前の挨拶をつぶやく。恵理がそれぞれにお笑顔を返す。「しかし俊哉は本当に絡まれやすいな。」

麻耶は改めて驚いたというよりそれを通り越してこしてあきれ果てているような表情をしてくる。

「まあ」大層な通り名もついてしまつてるよつだし、しかたがないのかもな。」

ふいに横を見ると葵は猫舌に苦笑しながら天津飯を妙な優雅さで食べている。そういう葵は何をやらしても器用にこなす。普段から心がけているんだろうか。

「怪我、しないでね。」

少し心配そうな顔で恵理が言った。いつものこととはいえ暴力的がことが嫌いな恵理からすれば不安になるのだろう。

「ありがとう。気をつけるよ。」

だからここは、素直につなづいておく事にする。実際、今のところ黒星は無いわけだし。

「しかし俊哉さん、本当に、気をつけてください。相手が何をするかわからないような人たちなんですから、どうか、命だけは。」

夕食の席について始めて、葵が口を開いた。

その口調はいつものすべてを見通したような余裕で悠々とした態度とはかけ離れていた。

切迫され、真剣で、憐憫すら感じじるすがるよつと向けられた言葉。俺はその向こうに弱弱しく震える少女の姿を見た気がした。

テーブルをかこむ誰もが葵の切実な様子に口を開けずにいるなかで、再び葵が、今度は小さくつぶやくよつと言つた。

「すみません、明日は迷惑をかけそうです。恵理、「ごめんね。」

それから食事はもういいです。そう言い残して葵は自室へ戻ってしまう。ドアがばたんと重たい音を食卓に鳴らす。

食堂には空虚で憂鬱な沈黙が残される。

「すこし、不注意だつたな。」

麻耶は依然として葵の消えたドアを見つめたままいほした。

「最近はなかつたから俺も少し油断してたよ。」

恵理は黙つたまま俺と麻耶の会話を聞いている。表情は少し暗い。

「恵理、すまないが明日は頼むぞ。」

「わかつた。」

恵理は静かにつなずいてから、また無音で食事を再開した。

俺も再び目の前の料理に箸を運ぶが、どうも美味く料理の味を感じ取れなくなつてしまつたようだ。楽しい夕飯はひたすら咀嚼して流し込む作業へ変わつた。

会話の無い食堂の空気に錯覚の重みを感じる。気になつて二人の様子を見ると麻耶は葵に触発されたのか心ここにあらずといつた様子で考え込んでしまつてゐる。恵理はそんな姉妹一人のことが心配なようで、よく笑うその表情も今は沈みこんでしまつてゐる。

結局その日は、それ以上の会話も無く食後は自然と解散した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5050o/>

---

魔女の館

2010年11月9日00時11分発行